

日本渡航記（ジョン・セーリス）

高德院は、1613年のキャプテン・ジョン・セーリスの日本渡航記（1900年にアーネスト・M・サトー編集、英国東インド会社の商船クローブの日本への訪問を記述している）で言及されています。

セーリスの作品からの一節は、「大仏」と呼ばれる特に有名な像について説明しています。銅でできており、内部は空洞ですが、表面はしっかりした厚さです。セーリスの推測は、画像が約21.2フィートの高さで、地面に座り、踵の上に臀を据えている形であると記述しました。彫像の腕は驚くほど大きいと説明されていますが、全体的なバランスも取れています。衣服を着た形です。この像は脇を往き来する旅人から、たいそう崇拜されていました。セーリスの一行のある者が像の胎内に入り、咳をしたり大声をだしたりしたが、大きく響きました。セーリスは、この像の上に旅客がつけた多くの文字や印を見ました。彼の付添人の一人がそれらをまねて、同じように自分のを書きました。